

# 日本におけるキリスト教の歩み

## その3 徳川禁教令・弾圧-1

江戸時代

1603～1688

1616年  
徳川家康永眠

1615年  
高山右近  
帰天

岡本大八事件以来、更に不信感を増す徳川家康は、1600年豊後に漂着したオランダ船の英国人航海士ウィリアム・アダムス、長崎奉行長谷川左兵衛らと親交を深めていった。兼ねてからポルトガル人やカトリックに敵意を抱くアダムス、彼らの影響もありキリスト教嫌いの徳川家康は、遂に1614年1月新たに禁教令を發布した。この背景には悪い噂も流れた。仏教界からは、キリシタンの教えは神仏の滅び、宣教師を手先にポルトガル、スペインが日本侵略を計画。更にキリスト教の影響が貿易の繁栄と共に拡大したと。その証拠に長崎の人口の大半が、キリシタンで占めている現状に脅威を覚えたのである。

家康はすでに政権を握っており、自分と合わないキリスト教を放置しなかった。遂に金沢の教会の中心人物であった高山右近を長崎に収監した。禁教令発令後には大勢のキリスト信者、宣教師、同宿らをマニラへ、マカオへと次々に追放した。その中には、高山右近もいた。遂に長崎の教会から信者の信仰の支えであった鐘の音が消え去った。

キリスト者の居なくなった長崎の教会は、奉行長谷川の命により取壊しが始まった。病院、その他の施設は閉鎖され、墓地の十字架も壊された。長崎のキリスト教関連施設の取り壊しが終わると、奉行長谷川ら一行は有馬へと移動した。有馬のキリスト者は、長谷川らの迫害にも勝る強い信念で棄教する事は無かった。しかし、その代償は大きかった。有馬大名の座を目論んだ長谷川だったが、目標を果たせず長崎へ再び帰還。長谷川が有馬から撤退すると信徒を励ますため幾人かの宣教師が戻って来た。その中に中浦ジュリアン神父もいた。他の地域にあっても大勢の宣教師らは、徳川の厳しい禁教令下であったが、役人の目を逃れて潜伏した。またマニラ、マカオへ追放された宣教師らも密かに日本に戻って来た。その上陸場所が、東シナ海に面する外海、福田、そして神の島周辺であったと伝えられる。その証として現在、神の島教会が長崎湾の入口の岬に海に向かって佇む。

長崎奉行長谷川が有馬を引き上げたもう一つの理由は、九州の大名たちが自分の家臣たちを長崎から引き戻す為だった。それは大坂の陣でキリシタン浪人が、豊臣側の味方をし大坂城に引き籠った為であった。これも徳川家康のキリスト教に対する敵対心であった。しかし、1616年家康は駿府で亡くなった。その一年前、マニラでは高山右近も62歳で帰天した。彼の遺体はイエズス会の教会内に葬られた。一方、支倉常長はスペイン・マドリッドで受洗。ローマに着くと日本でキリシタンの迫害を知り、彼の使節としての目的は虚しく消えた。日本国内にあって潜伏宣教師たちは新たな道を求め北海道に渡る者もいた。一方、二代将軍秀忠は、漸次鎖国への道を歩み始めた。

セルケイラ司教亡き後、日本への入国が困難となる。その中で潜伏しつつ↓